fct
GAZETTE

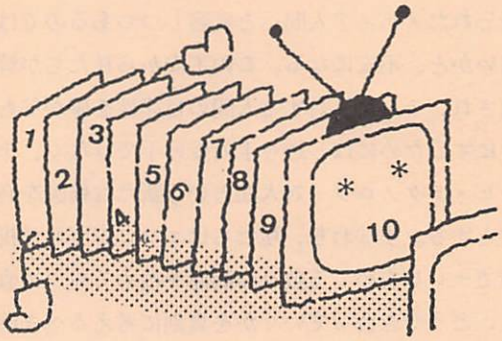
1987・11
vol・7
Number・27

ガゼットは
テレビと市民
のデータバンクです

編集・発行／子どものテレビの会（ＦＣＴ）神奈川県葉山町長柄1601－27　責任者／鈴木みどり
銀行口座　第一勧業銀行逗子支店（普通預金口座 1425785）　郵便振替口座　東京9－84097
購読料／年間（４回発行）　￥1,500円（送料￥240）　一部￥400

■特集１　ＦＣＴ10周年

新たな10年を展望する



1987年10月１日、ＦＣＴは創設10周年を迎えた。これを機に10年の多忙な日々を振り返えり、当初の目標の何が達成され、何が未解決のまま残されているのかを、めまぐるしく変化してきたテレビの10年史と並行してたどり、きちっと整理しておく必要があろう。しかし、この作業を軌道に乗せるよりも先に、私たちは11月27日、28日に予定する10周年記念国際フォーラムの準備に追われていて、すでにＦＣＴの新たな10年の歩みは始まりつつある。

もっとも、９月16日に刊行をみたメディア・ワークショップハンドブック『テレビの見かた、つきあいかた』（Ａ４版、106頁）を開いてみるなら、本書は日本ＴＡＴ委員会との共同作業で生まれたものではあるが、ＦＣＴが過去10年間に行ってきたテレビ診断分析調査からの数々のデータが収録されているのに気づくし、本書の制作自体がＦＣＴにとっては当初の目標の一つ「視聴者の自律」に向けた具体的な成果と呼べるものである。

ＦＣＴは送り手も受け手も研究者も各々の立場を超えて集い、市民すなわち人間の側からテレビのあり方を実証的に問い直すためのひろば＝フォーラムとして、この10年、位置づいてきた。テレビをめぐる問題の多くは送り手対受け手という従

■CONTENTS■

○特集１　ＦＣＴ10周年
ＦＣＴの新たな10年を展望する ……1
汗かきキャスターＶＳ一九分け氏 ……3
市民活動における女性たちの役割 ……4
○特集２　ＦＣＴ10周年を迎えるにあたって
様々な立場の人たちから支えられて ……6
○特集３　The FCT Chronicles
ＦＣＴ対外活動記録
1977年10月～1987年９月 …… 8
○ＦＣＴデータバンク
海外篇 …… 14
国内篇 …… 15

イラスト　市川雅美

来の対立関係では論じられないというのがＦＣＴの一貫した認識であり、このことはテレビの環境化が著しい今日では、一層、明白になっている。

エコロジカルな視点の導入

テレビが人間社会の営みと一体化し、私たちの前に環境そのものとして立ち現れている今、テレビの内容がそのまま社会現象と化して、人びとを意識している、いないにかかわらず巻き込んでしまう頻度が次第に高まっている。このような事態をみるにつけても、人間は送り手、受け手の別なくテレビ・テクノロジーに内側から侵蝕され、心を忘れたメディア人間へと変容しつつあるのではないかと、不安になる。この不安から私たちが解放され、テレビに対する人間の自律性を確かなものにするためには、送り手対受け手ではなく、テレビ・テクノロジー対人間という新たな構図を必要とする。すなわち、私たちはエコロジカルな視点でテレビをめぐる数々の問題を改めて見つめ直し、どうつき合っていくかを真剣に考えるべき時を迎えているのである。

エコロジーをテレビ問題に導入することの大切さを私たちに教えているのは米国のエコロジスト・広告マン、ジェリー・マンダーである。その著書『テレビ・危険なメディア』（時事通信社刊）はテレビが出現して以来、人間が生活を営んでいる地球、環境がどれほど大きく変貌してしまったかを跡付け、その上で、テレビが人間に与える神経生理学的影響を追求して、電子テクノロジーとしての特性に規定されているテレビと人間の関係を根源的に問う議論を展開している。

ＦＣＴでは、このマンダーの議論に注目し、新たな10年に向けたエコロジカルな視点の導入を確かなものにするべく、11月の10周年記念国際フォーラムにマンダー氏を招待することにしている。氏の結論はテレビの排除にあるが、それが現実的にきわめて難かしいという点も含めて氏と大いに議論し、学ぶべきところを学び取りたいという熱い思いがあって、この招待の企画となった。

広がる交流、連帯の輪

９月25日、10年の区切りとしては最後のＦＣＴフォーラムを東京・飯田橋で開催した。強い風と雨の天候が災いしてか、参加者はいつもに比べ少なかったが、そんな中にドイツ、フランス、フィリピン、アメリカからと国際色豊かな人びとの顔が混じり、この日のフォーラムは期せずして“国際フォーラム”の感を呈することになった。

実際、ＦＣＴは10年前、目標の一つに国際交流を掲げて出発したが、この活動は単に資料の交換にとどまらず、むしろ人的交流の面で次第に活発になりつつある。日本に在住し、あるいは取材に訪れる外国人が増えているが、その多くが日本のテレビを見て驚き、大いなる疑問を抱いてＦＣＴにアプローチしてくるようになっている。またテレビ問題は多くの国で重要な研究テーマになりつつあり、この点でも日本を訪れ、ＦＣＴとの交流を求めてくる研究者が増えている。

さらにメディア・ワークショップの開催ということでは、日本以上にアジア諸国で強い熱意がみられ、ＦＣＴは日本ＴＡＴ委員会に協力してこの数年、韓国、香港、台湾、フィリピンへと出かけている。来年２月にはインド・ボンベイでの開催がすでに決っており、スリランカ、ネパール等の近隣諸国からも参加が見込まれている。また日本で国際ワークショップを開くことも今後、あるかもしれない。ともあれ、ハンドブックが完成した今、その英語への翻訳、各国のテレビ事情に即したハンドブック作製への協力と、視聴者の自律に向けたＦＣＴ活動はこれからの新しい10年に、国境を越えた連帯の輪を広げつつ、一層、活発に続いていくことになろう。

さて、最後にもう一つ、テレビの送り手との交流についても触れておきたい。ＦＣＴの存在は送り手側で次第に認識され、フォーラムへ参加する人も増えている。だが、今後はＦＣＴの側からもっと積極的にアプローチして、テレビの制作や送出の現場での交流も必要になる。その望ましい方法を探るのも、新しい10年の課題である。

汗かきキャスターVS一九分け氏

江波戸　哲　夫

テレビ朝日のモーニングショーで美里美寿々さんの横に坐って、いつも汗ばかりかいて、緊張のあまり笑顔もひきつり、運動家学生の生硬な言い回しがついポロリと出てしまうあの人 ― 見ているこっちがいたたまれなくなって、チャンネルを他へ回したくなるほどなんですが、ボクはあの人なんだか好きでした。

きっとあの人は、少人数で赤提灯、いやそこまでいかなくとも小料理屋でもいいですけど、そんな所で、人生とか社会とかについて語ると、思慮深く、説得力のある、魅力的な議論を展開する人だと思います。友だちの友だち、ぐらいの人だからその噂を小耳に挟んだこともありますが、そんな人のようです。

ところがテレビじゃダメなんですね。

テレビのキャスターとか、スピーカーで人を引きつけるのは、キャッチフレーズ的に発言できる人 ― 「農業改革をうまくやったら10兆円のムダ省きますよ。サラリーマンは無税でいいんやでえ」などと言っているあの一九分けのオジさんが、そのチャンピオンです。事実をよく知ったり、まともに考える人には恥かしくても言えないことを、あの人は数百万人の前でシャアシャアと言ってしまう。これが飲み屋で言うんだったらいいんですよ。ボクも一九分け氏に「役者やのお」と応援演説ぐらいしてあげるかも知れない。

だけど一九分け氏はブラウン管の外では、企業人だとか官僚だとかを小料理屋にでも誘って、せっせと耳学問して、またまた良い加減なキャッチフレーズを仕込むのであります。多分。

一九分けと汗かきキャスターさんのブラウン管と飲み屋がちょうど対角線になっている。いや、位置関係がおかしいかな…？

真夜中に、ブラウン管の真っ白けになっている時間を使って、二人が時間無制限の一本勝負で論争したら、汗かきさんの方が人びとを納得させる論陣を張るでしょう。一九分け氏は視聴者相手にしゃべるのだったら〝なるほど〟と思わせてしまうようなキャッチフレーズ発言のその先を、汗かきに突っつかれ開き直ったりします。

でも普通の番組では一人のスピーカーに1分と喋らせはしない。こうなると俄然、一九分け氏の得意な勝負となってくる。

世の中にはどうしても沢山のコトバを使わないと説明できない出来事がある。あるいは、何かの事件を見るとどうしても沢山のコトバで分析してしまう人（考え深い人だと思います）がいる。

両方とも、一瞬一瞬に視聴率をはかっているテレビになじまないのです。テレビは大脳ではなく、反射神経の上にのっかったメディアだから大脳型の汗かきさんは、大脳に浮かんだ分析をどう反射神経的コトバに置き換えようかと思って、あんなに汗をかいてしまうのです。一九分け氏の方は始めから反射神経が出来事を捉えているんですもの、よく考えたら違っているかもなんてことはちっとも心配しないで、そのままストレートに反射神経的コトバで打ち返せばいいだけなのです。多分。

テレビとはそういうものだから、反射神経が悪いと言っているのではありません。いい反射神経と悪い反射神経があって、一九分けのそれは好かんと言うだけです。

同じ反射神経でも、テレ朝の人気キャスター、らっきょ頭クンのはなかなかのものだと思っています。時々、いかにも本質に向かって寸言を放っているという思いにさせられる。隣りに坐っている大脳型の朝日記者も（この人も、長い論争をすればらっきょ頭クンに負けるはずはないのですが）その寸言に舌も尻尾も巻いているように見えます。

汗かきさんがもう苦手な反射神経を使わなくてすむようになったようですが、おめでとうございます。あなたの経験したテレビについて、一晩じっくり含蓄のあるところを聞きたいですね。

（えばとてつお　作家）

市民活動における女性たちの役割

久　田　　恵

ＦＣＴが結成されて10年になります。

結成当時、私は30才になったばかりで、もっとも若い運営スタッフとして、生活の大半をなぜかＦＣＴの活動に注ぎ込んでいました。

ともかく、その忙しさは大変なものでした。パンフレットの作成、会員通信の編集発行、セミナーやシンポジウムの企画、研究プロジェクトの推進等々……、連日のように打ち合わせや会議があり、まるで"ＦＣＴ"にフルタイムで就職し、その余暇に生活費を稼ぐための自分の仕事をなんとかこなしているといった有様でした。

この活動のパワーは、むろん、ＦＣＴ結成の言い出しっぺでもある鈴木みどりさんの情熱的ともいえるパーソナリティに負うところが大きかったのですが、10年を経た今、改めて、振り返ってみると、ＦＣＴの女性が主体となった市民運動のオリジナリティに満ちた活動スタイルの中に、そのエネルギーの秘密が隠されていたように思います。

女性たちの"広場"の発想がパワーに

ＦＣＴは、発足当初から"子どものテレビ"を切り口にして、テレビを中心に広くメディアのあり方全般について問題を提起し行動し続けてきたわけですが、その基本的な立場は更にラジカルなものでした。

つまり、メディアの送り手に対して、その内容の改善を求めるということのみにとどまらず、「電波はいったい誰のものなのか！」と、鋭く問うことによって、公共の電波に責任のある受け手としての主体的な役割を果すべく行動しよう、と呼びかけてきた訳です。

しかし、いわゆる既成の消費者運動のスタイルをとらず、電波を共有し合う市民として活動を進めてきたことで、その立場のラジカル性にもかかわらず、研究者、送り手、主婦、学生……と、様々な立場の人たちを巻き込むことに成功したと言えると思います。

とは言っても、結成当初は、このそれぞれの立場を超えてメディアに責任のある市民として共に対等に語り合う"広場"を作り合うという原則を貫くことは、なかなかむずかしく、大変なエネルギーが必要でした。

とくに、電波の送り手の立場にある男性の運営委員からは、ＦＣＴの活動を"市民運動"と定義づけることにさえ、いろいろと抵抗が示され、何回も議論が繰り返されるといったプロセスもありました。

これは、男性がグループなり組織なりを運営する場合、企業社会をモデルにしたピラミッド型の関係性を発想しがちであり、女性たちが求める対等な"広場"の発想と対立してしまうことを実感させられた体験でした。

研究者はその専門性を、ジャーナリストはその表現能力を、放送関係者は送り手の立場からの豊かな情報を、子育て中の親は、受け手の側からの自由な発想を、フェミニストはフェミニズムの視点からの問題提起を…… とそれぞれの発想と能力と情報を重ね合わせてパワーを形成していくためには、立場を超えた対等な関係がなければ不可能です。

ＦＣＴの日常的な運営スタッフが主に女性たちによって担われていたことによって、かろうじてこの"広場"の発想が保たれていったように思います。

最近、女性たちから男性主導型の市民運動が、時として非常に権威的であったり、女性差別的であったりすることが、批判され始めていますが、ＦＣＴが女性主導型であったことは、活動のオリジナリティを保つ上で、大変重要なことだった気がします。

自立した運動のために必要な研究活動

ＦＣＴのこの10年を内側から支えてきた活動のひとつに、自前の研究プロジェクト推進への取り組みがあります。

市民運動が独自な研究プロジェクトを持ち、説得力のあるデータを日常的に集積していくことは、この情報過多の社会の中でいきいきとした活動を続けていくためには大変大切なことだと思います。

独自な研究活動は、グループの主体性を保ち、ひとつの政治的な立場に偏らない自立した運動を展開するためには、どうしても必要で、事実、ＦＣＴの活動に対する信頼感は、この研究プロジェクトの質の高さにあるのだと思います。

とくに、ＦＣＴの研究プロジェクトのユニークさは、専門家に研究やデータ作りを安易に委託したり、依存したりという方法ではなく、事務局や運営スタッフの女性たちの手で進められており、その研究報告書が活動の資金源の役割を果していることです。

また、ＦＣＴの研究プロジェクトは、初めて、フェミニズムの視点からテレビ番組の内容やＣＭのメッセージを分析し、“子どものテレビ”の問題に新しい課題を提起しました。

私も、結成２年後、このプロジェクトに参加し、子ども向けアニメーション番組の内容分析を試みましたが、番組のひとつひとつのシーン、ひとつひとつのセリフ、登場人物の人間関係、そしてその背景にある価値観等を丹念に拾い出す作業を通して、改めて、子ども向けのアニメーション番組がどれほど暴力と性差別に満ち満ちているかを知り慄然としました。

こういった隠されたステレオタイプなメッセージを女性の立場から指摘していく試みは、大変重要で、もっともっと女性たちがメディアに関心を持ち、その問題に積極的に取り組む必要性を感じました。

最近、『女のネットワーキング』（学陽書房刊）という全国の女性グループのガイド（600グループを収集）を17人の女性たちとまとめる仕事をしましたが、メディアに取り組む女性グループは非常に少なく、独立した項目をたてることができませんでした。

その意味でも、ＦＣＴの研究プロジェクトがこの分野でさらに成果をあげることを期待したいと思います。

市民活動に女性が参加すること

ＦＣＴばかりではなく、最近の市民運動の主たる担い手たちは、女性たちです。

70年代後半の国連婦人の10年を契機に、社会的な活動に参加する女性たちがぐっと増え、全国に様々なグループが生まれました。最初は行政指導型の活動スタイルが多かったようですが、婦人年を終えたことで、そういった活動がいったん退潮し、また再びより自立的で主体的なグループの活動が盛りあがってきているように思えます。

女性がこういった社会的な活動にかかわることは、女性が自立的な生き方を選択していく上で大きな役割を果すように思います。

10年前、ＦＣＴの創成期にかかわり、言うならば、ＦＣＴ事務局の“卒業生”を自負している私自身の体験から考えても、市民活動の中で得たものは、大変に大きく、いわば私にとっての学校ではなかったかと感じています。

通信の編集、セミナーの企画、プロジェクトでの研究等々の様々な活動を通して、その後の仕事のノウハウのほとんどを学び、人間関係能力や、ものを見る目も深まったように思います。

女性たちが、社会的な活動を通して手に入れたこういったノウハウを、互いに手渡し合えるネットワークを作り、市民運動の質とパワーを高める方向へ向かうことができたら、と思います。

男性が中心になって形成してきた産業社会の価値観や組織づくりの価値観に対し、もうひとつの新しい価値観を提示する役割を、今、女性たちが担わなければ、この社会のあり方や流れを変えることは、できないのではないかと思います。

（ひさだめぐみ・フリーライター）

■特集2　ＦＣＴ　10周年を迎えるにあたって　―その5―

さまざまな立場の人たちから支えられて

―ＦＣＴ 10年目―

1977年の発足以来10年間のＦＣＴの軌跡を４回にわたってたどって来た。「テレビの送り手と受け手の新しい関係を求めて」「大きな流れに抗して市民として出来ること」「手づくりのデータをもって発言していく姿勢を」「テレビ診断調査を視聴者の責任と考えて」４回を通読して下さった方にはＦＣＴの〝姿勢〟がわかっていただけたのではないかと思う。10月からはじまる11年め、新しい活動に向けて、最終回はマスコミとＦＣＴについてまとめてみたい。

７月末共同通信のＫ記者から、10周年を迎えるＦＣＴについて取材させてほしいとの申込。

ちょうど社の近くに出向く用のあった鈴木、竹内が編集部を訪れるかたちになって、今迄の活動や今後のことについて話し、報告書を手にしてニッコリした写真まで撮られてしまった。

１週間たった頃から私の家には朝９時すぎになると長距離電話が続々と。「長崎県で歯科医を」「広島で教師を」「宮城県で教育委員を」等々と名乗る方々が、今迄出版した報告書を全部、とかガゼットのバックナンバーを全部送ってほしいといった申込みなのだ。その朝の電話を受けると、「あ、今朝は広島の新聞、あ、今朝は宮城県らしい」とどの地方紙に載ったか見当がつくのも楽しくて、つい応待の声が親切になってしまった。

共同通信の記事は「市民の立場でテレビを問う」と大きな見出しでニッコリ写真入り、「報告書は専門家からも高い評価を受けている」とたいそう派手な扱いだった。一度の取材で全国の新聞に次々に紹介してもらえるこういう扱いは、資料の販売にもつながりとても有難い報道だ。

傍観者でいられなくなって…

「ＦＣＴさんはマスコミ受けがいいから」「いつも書いて貰えていいですね…」、同じような市民活動をしている人たちから何度も言われたことがある。とくに働きかけたこともないし、そんな時間も余力もない、ましてや〝色じかけ〟？でもない。「要するにクロウト受けするんですよ」と分析してくれた人もいる。それで思いあたるのは、フォーラムの参加者が時には半数位取材の方たちであることだ。マスコミ関係者や研究者をこの際クロウトと考えれば「そういう傾向がある」ことは否定できないかもしれない。それがプラスになることもあり、また一般の人が参加しにくいというマイナスに働く面もありで、このあたりが今後の活動の展開を考える上でのポイントになるだろう。

そのことはともかくとしてＦＣＴに関わって来るマスコミ人には実に様々な人がいる。

日本消費者新聞の今井眞介記者、２、３年前迄はＦＣＴフォーラムの名物的存在だった。会が始まる前には机をならべ灰皿を用意し、終ればかたずけるのを必ず手伝って下さる。そして１週間位すると新聞にフォーラムの内容をかなりのスペースを使って紹介し、掲載紙を送って下さる、何とも頼もしいお人柄。ＦＣＴの創設の頃市民グループの紹介記事を書くために取材に訪れたのがきっかけだった。そして３、４年も毎回欠かさずフォーラムに参加してから、「ちょうど子どもたちがテレビを見るようになって、あらためてテレビの問題が切実になってきた」と入会の手続きをされた。「テレビを否定的に見る立場には変りないが傍観者ではいられなくなりました。テレビを変えていく力の手助けが出来るなら……」と入会の弁を語っている。

南日本新聞に勤務している内村成孝は、鈴木みどりが講演のため鹿児島を訪れた時、取材に見えたのが最初の出会い。もう５年余りになる。もっとも個人としてはＦＣＴ発足当初からの会員で、

各紙のＦＣＴに関する新聞報道のスクラップを持って会いにこられたから、その肩書きを知らなかった鈴木を感激させた。内村記者はその後、東京のフォーラムに呼応して鹿児島ＦＣＴフォーラムを開催したり、上京の折にはスタッフ会議に参加して運営についてアドバイスを下さったり、地方会員として頼もしい存在だ。

毎日新聞社のＴ記者。ある時フォーラムの取材に現れ、すっかりテレビ問題に〝開眼〟してしまった。意欲的な彼は早速企画をたてて、当時ＴＢＳの絹村和夫編成局長を相手に、ＦＣＴスタッフ３人が、送り手と受け手の問題についてじっくり話しあう場を作り、３回に分けて大さなスペースを使った座談会を掲載した。Ｔ記者の意欲には大いに期待を寄せていたのだが、有能な方らしく外信部へ転じてロンドン特派員になってしまわれたのは、ＦＣＴとしては残念だった。

マスコミとどうつきあうか

朝日新聞学芸部のＧ記者も長い間ＦＣＴの報道に力を入れて下さった。フォーラムの開催案内はもちろん、分析調査報告書が出来る頃になると、「ゲラ刷りでもいいから早くほしい」と言われて印刷所から校了ゲラの控えを届けたりしたこともある。報告書が出ると必ず家庭欄に紹介記事を書き、最後に購入申込先を書いて下さるので、その掲載紙が出たあとは100本近い電話申込がある。

「調査結果は早く出さなければだめですよ」Ｇ記者はいつも早く早くとハッパをかけて下さった。

同じく朝日のＦ論説委員は、大阪朝日にいる頃から長距離電話で１時間近くも「ＦＣＴの見解はどうですか？」と様々なテーマについてかけて来られる方。昨年東京本社勤務になって、10周年シンポジウムの企画について相談にも乗って下さった。「テレビ問題」をテーマにした「天声人語」や夕刊のコラムを執筆し、ＦＣＴの活動にも深い理解をもっていて下さる。

日本経済新聞のＭ編集委員の場合は、ＦＣＴ３周年の取材を終えた直後に会員に。その後Ｂ会員として継続して下さっている。ＮＨＫの記者クラブ詰めが長かったので、テレビ各局の動きにも詳しく、ＦＣＴが申入れを行った時にはアドバイザーを引きうけて下さった。詰め寄ってはいけない、卑屈になってもいけない、程よい距離をおいて相手が出て来るようにすること、…マスコミに対するスタンスのとり方を教えて下さったのもＭさんをはじめとするメディア側の立場にある方たちだった。

たがいに非難しあうのではなく

かつて民放労連の事務局長としてめざましい活躍をし、いまは日本テレビのアメリカ駐在記者隅井孝雄もＦＣＴ創設以来のＢ会員として、フォーラムの報告者などを何度も引きうけて下さった。

10年の間に役職が上になってお忙しいのか昨今は参加されないが、フォーラムの折に時々お顔が見えていたテレビ朝日のＴ報道局長、ＴＢＳのＳ・ＣＭ部部長。また政党紙の赤旗、公明新聞からＮ、Ｍ記者。さらに地方紙の北海道新聞や河北新報の記者たちと、こういった方々が「個人の資格」で気軽に参加できる〝ひろば〟として機能していることも、ＦＣＴらしい一面といえるだろうか。

1977年に出た第１号の「ひろば」（会員通信の前身）に後藤和彦が次のように書いている。

「テレビ番組を生み出し、これを視聴することに関わるいろんな立場の人たちが同じ場所で一緒に考えようというのは実は言うは易く行うは難いことです。制作者はおっかなびっくりの逃げ腰で来るかもしれません。作る側の関係者は被告になったような強迫観念を持ってやってくるかもしれません。しかしそれではぶちこわしです。他人を非難し、糾弾する場ではなく新しいものをクリエイトする場でなくてはならないのです。いずれの立場も制作者と同じようにデリケートなものでしょう、しかし、みんなで協力して新しいテレビの世界を作り出すことがまず大切なこと（以下略）」と。

多くのメディア側の方達の立場をこえた参加があり、支援があったからこそＦＣＴの活動が続けてこられたのだし、今後も続けていくことが出来るのだと思う。（文中敬称略・まとめ　竹内希衣子）

■特集3　The FCT Chronicles

ＦＣＴ対外活動記録

1977年10月～1987年9月

・1977年

10/1 ～10/2 東京国際文化会館で創設セミナーを開き、ＦＣＴ子どものテレビの会発足。

10月　ＦＣＴニュースレター「ひろば」№1発行。

11/16　清水市ヒカリ幼稚園で講演と懇談。

・1978年

2月　ＦＣＴニュースレター「ひろば」№2発行。

3/3　放送文化基金の助成決定

4/18～5/6　米国ＡＣＴ第7回シンポジウムに、ＦＣＴより5名が自費参加。

6/14　衆議院通信委員会電波放送に関する小委員会で参考人として意見を述べる。

8月　ＦＣＴ英文ニュスレター№1発行。

9/1　ケビン・テインドール博士の記者会見主催。

9/27　ＦＣＴファミリーテレビガイド作製。

11/14～11/18 文京区経済課主催・消費生活展子どもコーナーで米国の子ども番組を紹介。

11/19　逗子市沼間保育園父母グループ主催研究会に講師として出席。

11/29・12/6　東京都福生市公民館主催婦人学級に講師として出席。

12/2 神奈川県津久井町立鳥屋小学校ＰＴＡで講演。

12/21　「子どものテレビを良くする連絡打ち合わせ会」に出席・懇談。

・1979年

1月　会員通信№1発行（以降82年度まで6月と年2回発行）

1/23　千葉県船橋市松原団地保育の会で講演。

2/4～2/10 ＦＣＴ役割モデルプロジェクト第1回モニター調査実施。

2/9　兵庫県姫路市消費生活センターで講演。

2/24　千葉県千葉市吉野木保育園で講演。

3/15　朝日新聞コラム〝世界と私〟の取材受ける。

4/2　日経新聞婦人家庭部コラムの取材受ける。放送文化基金助成研究報告書を提出。

5/13　広島カトリック教会広報協議会で講演。

5/15　ＰＬＯ東京事務所を訪問取材。

6月　ＦＣＴ案内パンフレット作製。

6/9　兵庫県尼崎市武甲地区会館で講演。

6/17～6/23 ＦＣＴ役割モデルプロジェクト第2回モニター調査実施。

7/9　ＮＨＫ日放労働組合青少年部会で講演。

7/17　ＦＣＴ英文ニュースレター№3発行。

7/20　ＪＮＮ加盟放送局（ＴＢＳ系）訪米視察団

ＦＣＴフォーラム記録

＜1977年＞

10/1・10/2 第一回ＦＣＴ創設セミナー・子どものテレビの公共性、パネラー―奥平康弘、隅井孝雄、高桑康雄、堀部政男、正田彬、永畑道子他。

10/24　幼児とテレビ。

12/10　スウェーデンの子どものテレビ、ビヤネール多美子。

＜1978年＞

1/7　新春フォーラム

2/19　子どもにとって面白さとは何か。

3/23　アメリカ・ボストンＷＧＢＨ局制作の子ども番組「ズーム」を見る。

5/28　いま子どもになにが起こっているのか―米国テレビの現状をみて。

8/31　ＦＣＴ国際交流フォーラム・テレビジョン―新しいオーソリティー、豪・テインドール。

9/9　テレビＣＭについて、主婦連調査報告。

10/14　市民グループとしてのＦＣＴを支えるもの、奥平康弘、堀部政男、野村かつ子。

10/21　子どものテレビに多様性を求めて！

11/11　ＦＣＴモニター調査のための予備調査。

企画の研修会へ講師。

9/4　放送文化基金の助成決定。

9/20　第1回消費者情報交流集会に出席。

9/21　日本生協連合主催シンポジウムにパネラーとして参加。

9/22　大学生・大学院生の卒論相談フォーラムを開く。

9/25　愛媛県松山市ロザリオ幼稚園で講演。

9/27　神奈川県葉山町立長柄小学校ＰＴＡで講演。

10/1　日経新聞の取材を受ける。

10/11　婦民新聞の取材を受ける。

10/29　放送文化基金発表会で53年度研究の報告。

11/28　Asian Church Media Institute シンポジウムに参加、講演。

12/1　横浜市立保育園父母の会で講演。

12/6　サンデー毎日より取材。

12月　第2回調査報告書「アニメーション番組に描かれる価値観」発刊。

• 1980年

2/5・2/7　人形劇センター講座（於東京渋谷・川崎市）で講師。

2/27　千葉県市川市村井幼稚園で講演。

3/17　東京都福生市松林会館婦人学級へ講師。

5/1　マスメディア研究所主催・メディア教育を考えるキリスト者の集いで講演。

5/8　アルコール飲料ＣＭモニター調査実施。

5/11～5/17　ＦＣＴ役割モデル・プロジェクト第4回モニター調査実施。

6/19　板橋区立河岸幼稚園父母会で講演。

7/5　世田谷区立玉川台図書館で講演。

7/20～7/26　ＦＣＴメディア教育プロジェクト・モニター調査実施。

10/25　日本新聞学会秋季発表会で研究発表。

11/21　神戸市主催「第4回神戸市消費者会議」でＦＣＴ活動について報告。

12/5　目黒区教育委員会主催家庭学級リーダー研修会で講演。

• 1981年

2/6　福生市社会教育講座で講師。

3月　ＦＣＴ編著「テレビと子ども―どう見ているか／どう見せるか」を学陽書房より出版。

3/13　藤原ひろ子議員の依頼で衆議院逓信委員会にＦＣＴ資料を提出。

3/20　雑誌「マザーリング」より取材・我孫子市消費生活講座で講師。

4月　ガゼットNo.1発行（以降7、10、1月と季刊で年4回発行）

4/21～4/23　ＴＡＴワークショップ（於東京）で講師。

5/15　国民生活センター講座担当。

5/18　ファミリア（神戸）で講演。

6/18　横浜ＹＭＣＡセミナー講師。

12/9　ハイオービス双方向通信システムについて、東南アジアの子どもの実情について。

＜1979年＞

1/13　メディア教育の可能性・その1―映像メディアの理解とテレビの批判的視聴について。

2/10　消費者としての子どもの権利、加藤真代他。

3/24　放送文化基金助成研究の結果報告。

4/14　子ども向けホームドラマにみるステレオタイプ―第1回モニター調査報告と討議。

5/12　差別なき教育を受ける権利、ラジオにみる子どもの言い分、半田たつ子他。

6/9　メディア教育の可能性・その2―親子同時視聴について。

7/14　アニメーション番組に描かれている価値観（第2回モニター調査結果報告・討議）

9/8　メディア教育の可能性・その3―子どもたちにテレビをどう教えるか、上野直樹他。

10/13　ACT制作フィルム―KIDS FOR SALEをみる。東南アジアの子どもについて、荻野祥三他。

11/10　子ども向けＣＭの内容分析を目的とするＦＣＴ2周年記念シンポジウム・子どものテレビの新しい行動原理―三つの分科会で討議、伊藤洋子、佐藤知恭、白川順一他。

＜1980年＞

6/25　月刊誌「主婦の友」より取材。
7/5～7/11　ＦＣＴ第１回テレビ診断週間調査実施。
7/11　横浜市南区地区連合自治会で講演。
7/18　福生市公民館講座講師。
8/12　日経新聞より取材。
10/25　横浜市南区の文庫「ぽちぽち」で話す。
11/7　横浜市鶴見区公民館講座講師。
11/21　板橋区消費者センター講座講師。
11/24　藤沢市立六会小学校ＰＴＡで講演。
11/25　消費者問題懇話会へ講師。
11月　第１回テレビ診断分析調査報告書「子どもの見ている番組とＣＭ」発刊。

• 1982年

1/20　会員通信№８発行（以降年４回発行）
3/9　東京都港区みなと幼稚園で講演。
4/15　共同通信より取材。
5/19　雑誌「プチタンファン」より取材。
5/31～6/6　ＦＣＴ第２回テレビ診断週間実施。
6/16　東京都消費生活センター立川支所講座講師。
7/8　東京都消費生活センター池袋支所講座講師。
7/15　鹿児島県消費生活センター講座講師。
7/15　南日本新聞の取材受ける。
8/12　国連研究員Ｂ・コルキー氏と懇談。
8/19　日本私立小学校連合会視聴覚部会で講演。
11/5　スリランカの研究者マドラセル氏来訪。
11/19　厚木市消費生活センター市民大学講座講師。
11/22　消費者問題懇話会講師。
11/26　板橋区消費者センターあやめ児童館講座で講師。板橋区富士見小学校保護者会で講演。
11/27　横浜市西前小学校ＰＴＡで講演。朝日新聞にテレビ診断報告書記事。
11月　第２回テレビ診断分析調査報告書「テレビと子どもの健康」発刊。
12/1　横浜市南区役所セミナー講座で講師。

• 1983年

1/17　「ちいさいなかま」の取材に協力。
1/18　藤沢市辻堂小学校ＰＴＡで講演。
2/3　毎日新聞より取材。
3/8　小田原市消費生活センターで講演。
3/16　沼津市水曜会（教師研究会）講師。
4/22　「プチタンファン」より取材。
5/23～5/29　ＦＣＴ第３回テレビ診断週間調査実施。
6/12　横浜市高木学園母親学級へ講師。
7/27　女性誌「クロワッサン」より取材。
8/20　「国民生活センター」主催パネルディスカッションにパネラー。
9/13　Ms.O'Kelly（米国研究者）に研究協力。
9/14　New Era Forumで講演。「テレビと行動」出版。小田原市立千代小学校ＰＴＡで講演。
9/29　小田原市立山王小学校ＰＴＡ講師。
9/30　世界コミュニケーション年市民会議参加。
10/20　小田原市下府中小学校ＰＴＡ家庭学級講師。

1/26　80年の子どものテレビを展望する、スライド「子どもとテレビ」（イレーヌ・グッドマン制作）を翻訳紹介。
3/8　子どものニーズをどうとらえるか。
4/12　ＦＣＴ国際交流フォーラム・食品ＣＭの日米比較―米国のバーカス教授を迎えて。
5/10　放送制度について―公共放送のあり方。
6/14　幼児とテレビ、ＮＨＫ世論調査所報告他。
7/12　日本におけるメディア教育の実践、成城学園初等部の映像教育報告、大森哲夫他。
9/20　親子同時視聴を考える。
10/11　情報公開法とＦＣＴ。
11/8　特別なニーズを持つ子どもたちとテレビ。
12/8　ＦＣＴ３周年記念シンポジウム・子ども向けテレビＣＭを考える、仲佐秀雄、梶谷武弘他。

＜1981年＞

1/31　子どものテレビをめぐる諸状況。
3/14　テレビと障害をもつ子どもたち、三浦基、大谷リツ子他。その後「テレビと障害をもつ子どもたち」聖文舎、「テレビと子ども」学陽書房、の出版記念パーティー。
3/31　藤沢フォーラム・映像教育を考える。
5/9　テレビのしつけ学、瀬田隆三郎
6/13　ＦＣＴテレビ診断発表―ＦＣＴ開発のチェ

10/30～11/15　ＴＡＴ台湾・香港・韓国ワークショップ講師。

11/18　新聞学会秋季研究会で研究発表。

11/19　第３回テレビ診断分析調査報告書「テレビと家族」発刊。ＦＣＴ紹介パンフレット発行。

11/24　東京都婦人問題協議会へ講師。

・1984年

2/17・3/2　武蔵野市社会教育講座で講師。

3/2　ＣＭ問題で共同通信の取材受ける。

3/13　大和市消費者講座講師。

4/7　日本テレビ「ズームイン朝」制作者・富尾氏を訪問インタビュー。

4/28　月刊誌「子どもと保育」の取材受ける。

6/4～6/10 第４回テレビ診断週間調査実施。

6/26　葉山町立下山口小学校ＰＴＡで講師。

7月　テレビ朝日「ビバ！赤ちゃん」（総理府提供）へゲスト出演。

7/20　東京都青少年健全育成課主催パネルディスカッションにパネラー。

7月　デンマーク記者、日経新聞、プチタンファンより取材。

8/3～8/5 女性学講座（於：国立婦人会館）に参加、研究発表。

8/17　月刊「かながわ」の取材受ける。

9/5　静岡県消費者シンポジウムでパネラー。

10/1　時事通信の取材受ける。

10/4　静岡県南部公民館講座へ講師。

10/9　練馬区教育委員会主催講座担当。

10/18・10/25 日本ルーテル神学大学マスコミ講座でメディア教育の講座担当。

11/12　大田区立六郷小学校ＰＴＡ家庭学級講師。

11/20　横浜市鶴見区社会教育講座講師。

11/21　福井県消費者リーダー研修講座講師。

11/27～11/29 韓国ＴＡＴメディア教育講座講師（於：東京）

11/30　川崎市多摩市民講座講師。

12/14　「サラ金時代の学校教育を考える集い」に出席。

・1985年

2/9　第４回テレビ診断分析調査報告「情報化する朝のテレビと主婦たち」発刊。

2/14　八王子児童教育セミナー講師。

2/19　朝日新聞家庭欄「おやつＣＭ」で取材受ける。

2/28　福武書店「小学生のお母さん」より取材。

3/17　日本青年会議所教育問題委員会講師。

3/23　ＮＨＫ愛宕山「世界の子どもとテレビ」で講師。

3/27　「放送批評」主催座談会に出席。

4/16　「視聴覚教育」、「栄養と料理」より取材。

4/23　横浜市講座「情報化時代と子ども」講師。

4/26　ＣＭ連絡会春季大会に出席。

4/28　日本新聞学会で研究発表。

ックシートの試用及びテレビ診断報告。

7/11　子どものテレビを変えられるか、石井英行、中村寿二、平賀圭子、飛田恵理子他。

9/5　各国の人気番組にみられる男女像、村松泰子他。

10/3　ＦＣＴ４周年記念フォーラム・米ＡＣＴ・ペギーチャレンさんを迎えて、視聴者とテレビと言論の自由と、隅井孝雄、堀部政男他。

＜1982年＞

1/30　テレビの送り手は何を考えているのか、龍村仁、福岡彰夫他。

3/13　子どもの知的教育とテレビ、白井常他。

4/10　テレビで遊ぼう―吉祥寺ＣＡＴＶ局での新しい試み、大橋一範他。

5/15　平和を願う私達にとって子どものテレビの何が今、問題なのか。

6/12　アニメ番組の可能性を考える、瀬谷玄司他。

7/10　メキシコのテレビ事情、井上輝子他。

8/28　第１回ＦＣＴ会議

9/11　市民が制作するテレビ番組の危機、中坪他。

10/9　女性から見たテレビの現場、木元教子他。

11/20　第２回テレビ診断分析調査報告会。

12/11　ＦＣＴ５周年記念フォーラム・番組制作者とテレビの現在、村木良彦他。

5/13　東京都生活文化局委託により「マスメディア文化と女性の意識」研究グループに参加。
5/27　日経新聞経済部の取材を受ける。
6/19　サンダースさん（豪州教師）来訪・交流。
7/31　月刊誌「青少年」に取材協力。
9/17　オラタイさん（タイの研究者）来訪・交流。日経「パーソナル」に取材協力。
9/20　相模原市消費生活センター講座講師。
10/11　共同通信社会部の取材受ける。
10/14　東京都消費者センター西多摩支所講座講師。
10/14～10/20 第5回テレビ診断週間調査実施。
10/18　ＴＡＴ日本委員会とテレビ環境研究会を組織し、メディア教育ハンドブックの作製に入る。
10/25　アストリッド氏（グァテマラ）に取材協力。
11/11・11/13 ＴＢＳ昼の番組に出演。
11/13　赤旗新聞、毎日新聞より取材。
11/14　ＮＨＫ・神奈川県教育庁共催シンポジウムにパネラーとして出席。
11/23　真鶴町教育委員会講座で講師。
12/4　三島市役所消費生活講座で講師。月刊誌「わたしの赤ちゃん」の取材を受ける。
12/6　月刊誌「マダム」の取材を受ける。
12/15　朝日新聞社会部の取材受ける。
12/16　練馬区石神井保健所講座で講師。

• 1986年

1/21　日経新聞家庭欄より取材。
2/3　東京・巣鴨教育会館母親学級で講師。
2/6　豊島区教育委員会母親学級で講師。
2/8　新座市社会教育講座で講師。
2/28　中野区消費生活センター講座講師。
3/2　富士見市「こばと保育園」父母学習会講師。
3/6　ＮＨＫ番組「今あらためてテレビとは？」で取材を受ける。
3/15　東京タイムズ家庭欄より取材。
3/27　米国研究者Ｄ.Rolandeli 氏に研究協力。
4/19　第5回テレビ診断分析調査報告「テレビと子どもの人権」発刊。
4/21　"テレビＣＭ改善の申し入れ"をテレビ各局、民放連、電通、博報堂、ＣＭ制作者連盟にする。
5/1・5/8 テレビ神奈川に出演。
5/21～5/24 韓国のメディア教育ワークショップで講師（於：ソウル）
5/22　目黒区民センター母親学級で講師。
5/30　ＮＨＫ視聴者会議（神奈川県）のメンバーに委嘱される。
6/24　消費者実務研究会へ講師。
7/13　朝日新聞「私の言いぶん」の取材受ける。
7/18　大和市教育委員会家庭学級で講師。
8/2　国民生活センター「たしかな目」より取材。
9/3　東大和市社会教育学級講師。
10/9・11/16 メディア教育ワークショップ（於：川崎市藤ケ丘教会）講師。

＜1983年＞

1/29　主婦のテレビ意識はどう変わるか、和田他。
3/12　これからの視聴率はどう変わるか、石川旺。
4/9　テレビのいじめは子どもたちにどう受けとめられているのか、名取弘文、村瀬寿人他。
5/14　子ども番組制作者に聞く、宮村妙子他。
6/11　テレビの音と光が子どもに及ぼす影響。
7/9　子どもの表現力、創造力とテレビ。
9/10　テレビ時代の自由ラジオ、粉川哲夫他。
11/19　ＦＣＴ6周年国際交流フォーラム・テレビの前の家族、テレビの中の家族―Ｇ・コンクリン（ＴＡＴ）

＜1984年＞

1/28　ＣＭは商品か文化か、中川浩之他。
3/10　テレビで言えないこと、言いにくいこと、松田浩、星野敏子他。
5/12　主婦は情報にふりまわされているか。
6/12　湘南フォーラム・子どものテレビの現状。
7/14　朝のテレビ・幼児番組が減って何が変ったか、富尾捷二、星野務、大熊得二他。
9/8　ＩＮＳは私たちに何をもたらすか。
11/10　これでよいのか子どものテレビ、小平他。

＜1985年＞

2/9　情報化する朝のテレビと主婦たち、佐中他。

10/14　多摩東消費者センター講師。
10/29　東京都立川消費者センターでメディア教育講座。
10/29　「赤旗」日曜版より取材受ける。
10/31　目黒区立上目黒烏森小学校ＰＴＡで講演。
11/2～11/8 フィリピン・マニラ市でアジア・メディア・ワークショップ開催・講師。
11/11　東京都委託研究「マスメディア文化と女性」報告書発表（ＦＣＴも研究参加）
11/12　レジナ幼稚園で講演。共同通信より取材。
11/19　川崎市多摩市民会館講座担当。
11/21　神奈川県教師研究会で講演（於：三浦市立三崎小）。小金井市前原小学校ＰＴＡ読書サークル講師。「民衆文化フォーラム」でパネラー。
11/28　川越市消費生活センター講座で講師。
12/2　府中市自主学級・さくらんぼ学級で話す。
12/15　「神奈川の教育を考える会」講座で講師。
12/17　東急ＣＡＴＶ事務局訪問。

• 1987年

1/12　中野区婦人行動計画推進を促す会で話す。
2/24　消費者問題懇話会で講師。
3/2　青少年育成国民会議・分科会「テレビと青少年」の司会担当。
3/12　豊島区消費生活センター講座講師。
3/14　大阪・人権歴史資料館「女性サロン」講師。「世界の女性とコミュニケーション・メディア」
3/17　青少年育成新潟県民会議で講演とメディアワークショップ。
5/6　中野区婦人問題研修会で講演。
5/25～5/31 第６回テレビ診断週間調査実施。
6/5　座間市北区文化センター・母親学級担当。
6/10～6/13 スウェーデン・ストックホルム大学で開催の国際ビジュアル・リテラシー・シンポジウムに出席、研究発表。
7/3　三浦市下浦市民センター家庭教育学級講座講師。
7/15　川崎市消費生活センター「暮らしの大学」講座講師。
7/21　共同通信の取材を受ける（ＦＣＴ10周年をむかえて）
8/21　日本ＰＴＡ全国研究大会広島大会の特別分科会「テレビと青少年の健全育成」でパネラー。
8/31　神奈川県勤労婦人大学講座講師「女性とメディア」
9/5　日本社会教育学会（於：仙台）で協同研究発表。「女性の意識とメディア教育」
9/11　日本放送文化基金の助成決定（11月のＦＣＴ10周年記念フォーラム関連事業に関して）
9/11～9/18 ＷＡＣＣアジア地区総会（於：シンガポール）出席。
9/16　メディア・ワークショップ・ハンドブック「テレビの見かた、つきあいかた」（Ａ５版、106頁）を日本ＴＡＴ委員会と共同で制作・刊行。

5/11　ＦＣＴ第１回ＣＭサミット、渡辺文学、今成知美、町田季子、船瀬俊介、今野健一他。
7/13　ＮＨＫはうけていますか？川竹和夫他。
9/7　湘南フォーラム・テレビについて学ぶワークショップ、信江慶子、鈴木章子他。
11/30　ＦＣＴ８周年記念シンポジウム・テレビと子どもの人権を考える、鈴木孝雄、三井マリ子。

＜1986年＞

2/8　テレビＦＣＴワイドショー・特集「夕やけニャンニャンを斬る」、アストリッド他。
4/19　ＦＣＴ第２回ＣＭサミット、船瀬俊介他。
8/2　テレビと女性の役割固定、奥山妙子、吉田清彦、久田恵。
9/6　湘南フォーラム・メディア教育とは何か。
11/16　ＦＣＴ９周年記念フォーラム・思春期症候群とテレビ、鈴木裕也、児玉澄子他。

＜1987年＞

2/7　ＦＣＴトークショー・オルターナティヴテレビの可能性を考える、安藤栄雄、内海愛子、甲斐田万智子他。
5/16　ＦＣＴ第３回ＣＭサミット・育児商品ＣＭをどう考えるか、川崎由利、加藤忠明他。
9/25　テレビの見方つきあい方―メディアワークショップ。

FCT データ・バンク

―海外篇―

●メディア教育－お祭り騒ぎで終るか、それとも教育の新領域となるか

Media Education:Band Wagon or Wagon Train?, by Cary Bazalgette,Presented to the Symposium on Verbo-Visual,Stockholm,June 1987。

1987年6月ストックホルムで開催されたVerbo-Visual Literacy 国際会議に提出された研究報告。筆者は英国のＢＦＩ（British Film Institute国立の英国映画研究所）教育部スタッフ。

英国におけるメディア教育（特にテレビと映画）の方法や位置づけでは、ここ４年の間に著しい変化がみられる。この動きは新しがり屋の単なるお祭り騒ぎ（band wagon）で終ってしまうのか、それともリテラシー（literacy）の定義や考え方を抜本的に変革して教育の新領域を拓く機動車（wagon train）となるのか、という問を掲げて、まず英国におけるメディア教育の歴史をたどっている。

英国では従来、メディアは「だまされやすい集団」（子ども、第三世界の人びと、教育レベルの低い労働者階級、時として女性）に向けて作られたものが多く、それらの集団はメディアの提供する情報を無批判に受け入れ、思考や行動で強い影響を受けていると言われてきた。この一般的なメディア観が80年代に入って問い直されるようになり、それと平行してメディア教育の新しい展開がみられるようになってきた。

メディア教育が改めて議論される中で、「メディアについての教育は、特に意識的ではなかったにしろ、これまでも行ってきたことだ」という反応や、また「初等教育は本来、直観的かつ自然に行われるべきもので理論は不必要である」として、「メディア教育は他の教科の手段としてあるのではなく、それ自体固有の概念と目標を持つ」とする見解に抵抗を示す人もいる。しかし、このような認識は子どものメディアに関する知識や技能を過少評価しているところから来るものではないか。初等教育の教師が子どもを受け身の視聴者と捉え、メディアの内容を無批判に受け入れるだけと考えている限り、メディア教育は創造性のない、現状の改良だけに終る活動と受けとられてしまうだろう。しかし筆者はここで、従来の文字を中心とする教育で「読む」という行為がどのような機能を果しているかを問い直してほしい、と提案する。

「読む」ことは能動的かつ統合的なプロセスであって、人は「読む」ことで知識を得るが、さらに自分が既に持っている知識をもとにして読んでいるテキストの内容に多くをつけ加えている。この事実から、子どもがテレビや他の視聴覚メディアを見ることを、印刷されたテキストを読むことのアナロジーと考えてみるなら、メディア接触を異なる観点から理解することが可能となるだろう。

子どもは就学の時点で既に一般に考えられているほど視聴覚メディアに関して文盲ではない。彼らは視聴覚テキストから一つのまとまった意味を読み取ることができ、テキストの種類を理解し、その構造を推測することもできるであろう。テキストの行間を読んで、批判的な見解を持つこともできるかもしれない。子どもはまたテキストのリアリティ（現実性）の度合を判定することもでき、その過程でテキストのスタイル、種類、制作過程に関する知識を引き出すこともできるかもしれない。

もちろん、このアナロジーは単純ではないし、検証もほとんどされておらず、Hodge とTrippがオーストラリアの600人の児童を対象に行った研究が知られるのみである。この研究からは年齢別のメディア・リテラシー・レベルの解明が今後の課題として示唆されている。

メディア・リテラシーを学校教育の目標にするより、リテラシーの概念を在来の印刷された教材以外のメディアにまで広げることを考える方が良い。そのためには、これまでのような時々のトピックスを断片的に提供する形ではないメディア教材が必要である。メディア教育はいずれ初等教育カリキュラム全体において中等教育への準備を含む重要な役割を担うようになると考えられるが、それを可能にするためにも、子どもがどのようにしてメディアの枠組を認識するのか、子どものメディア理解はどのようにして発達していくのか、そのプロセスへの望ましい介入の仕方などについて研究を深める必要がある。

活字メディアで「書く」ことと視聴覚メディアで「制作する」ことの類似点や相異点にも留意したい。子どもが文字で文章を書くのと同じ意味でカメラを使いこなし得るのかどうかについては、まだほとんど解明されていない。さらにビデオ作品の制作で子どもがテレビ放送について学習していると考える人が多いが、果してそういえるだろうか。

以上のように、初等教育におけるメディア教育は多くの未解決の問題を抱えている。しかし確かに言えるのは、メディアに対する批判的なアプローチに高い関心が集まっているということである。

筆者は過去２年間にＢＦＩを中心に英国各地の現場教師、研究者と共にメディア教育研究会を組織し、初等教育の場での実践と研究を積み重ねてきた。この過程で同研究会はメディア教育のカリキュラム開発を行う際に考慮すべきキーコンセプトとしてメディアの①構造、②流通経路、③表現方法、④分類の仕方、⑤リプレゼンティション（現実をどう反映しているか）の５点に同意した、と述べている。（レビュー　宮下浩子）

FCT データ・バンク

―国内篇―

●子ども文化としてのテレビ、小平さち子、NHK放送文化調査研究所 1987年8月。

副題に「海外の"子どもとテレビ"をめぐる動向から」とある通り、オーストラリア、イギリス、西ドイツ、アメリカというテレビ先進国における動向を整理して、いずれの国でも日本とは比較にならないほど積極的かつ厳しい取り組みがみられることを詳細に報告している。

オーストラリアでは子ども向け番組基準が制定され、また子どもテレビ財団を設立して良質の子ども番組制作に経済的援助を行っている。イギリスの放送基準では暴力描写に関して具体的に厳しく規制している。アメリカでは連邦政府の各種委員会、市民レベルでの活動が常に活発に続けられてきた。

日本の情況については残念ながら一般論にとどまっていて、諸外国の事情と比較しての議論、分析は試みられていない。いずれにしろ、このような報告書がNHK内部から出てくるのを歓迎するが、さりとて、その結果、放送の現場で―NHK及び民放で―どのような変化が期待できるのか、ぜひ知りたいものだ。さらに日本製のアニメ番組やアメリカ製のソープオペラが大量に輸出されているアジア、南アメリカ等の第三世界で子どもたちはどんなテレビ情況の下にいるのかも、ぜひ追跡し、報告してもらいたい。（M）

●特集・メディアと大衆文化の現在「新聞研究」№434、1987年9月。

メディアの変容と多様化が進行する中で大衆の行動や文化はどう変わりつつあるのかを考える特集。①中野収「かくしてメディア社会は進行する」②清水克雄「情報消費社会と新聞」③塚本三夫「メディア変容のなかのジャーナリズム」④野村雅昭「メディア社会と日本語」⑤石川旺「受け手：自立性の危機」⑥藤竹暁「大衆文化とテレビの位置」

清水（朝日記者）は情報が断片化して意味を失い、一瞬にして使い捨てられる情報消費社会になっていると述べ、人びとは情報があふれているのに情報飢餓感に苦しめられていると指摘している。この情況に大手の新聞社や出版社が注目し、情報を一定の限定した人びとだけに送りとどけるクローズドメディアを開発しつつあるとも述べている。

中野（法政大教授）はマクルーハンの言う「メディアはメッセージである」に基本的に同意しつつ今日の社会が情報化というよりメディア化しつつある情況を論じて、人びとは今やマスメディアの権威を認めず、従属もせず、マスメディアをひとつの文化・社会現象、享受し弄ぶ対象とみなし、かつ実行していると言う。

このような議論に疑問を呈しているのが石川（NHK文研主任研究員）で、石川によると受け手である「われわれは批評眼、鑑賞眼、認識能力を衰退させ、メディアが供給する情報の洪水の中に自発性を埋没させている」（M）

●わたしの言い分・福原義春資生堂社長、朝日新聞 '87年9月13日付。

日本広告主協会の電波委員会委員長としての発言。テレビにおける広告効果は今迄量ではかる尺度しかなかった。商品広告がどのくらい人に見られ、売行きにどう変化があったか、という視点しかなかったが、広告主としては視聴者の質をどうとらえるかという点でいつも不安が残った。そこで、広告主とテレビ局、広告代理店の三者が、それぞれの立場で、視聴者の心の動き、いわば量より質をどうとらえるかあらためて考えるために、テレビの視聴率をテーマとした研究をすすめることになった。視聴率の高い番組を選んで広告を出せば効果が上るということはなく、見る人が少くても評価の高い番組の方が広告効果が高いということもある。商品の質にあった番組を選ぶために、視聴質という考え方を導入していく研究をすすめたい。

主婦の就業率が高くなって、主婦をターゲットにした商品の広告も午後より夜10時過ぎの方が効果的というように変ってきている。「よい番組を提供することで企業としてのイメージアップにもなると考えている私共の立場からいえば、視聴率がすべてではありませんよ、という我々の認識が広がればテレビの番組づくりにも変化が見られると思いますが」と述べている。テレビ局は何かといえば「泣く子もだまるスポンサー」と広告主のせいにしては逃げ腰になる。広告主側のこうした「言い分」は、よりよいテレビを求める視聴者には心強い発言と思えるのだが……

●茶の間の神様 ― 筑紫哲也のテレビ現論17・堂本暁子、朝日ジャーナル '87年8月14、21日合併号

'80年から1年間堂本さんはベビーホテル、無認可保育所の問題をくり返し報道したTBSのディレクター。反響は大きく、児童福祉法の改正にまでつながることになったこの仕事を通して、「テレビって一方通行だと思ってたのが、そうではなく共振する。すぐに反響が返ってきて、そこにまた取材にいくという感じで、しまいにみんなで作っているという実感をもてた」と語っている。

6カ月間週に1回ずつこれでもかこれでもかと追っている間、まるでドンキホーテみたいだったが、ある時ひとつ垣根がはずれたらまるでせきを切ったように活字メディアがとりあげるようになり、ついにキャンペーンになった。活字や国会や様々な存在が堂本さんの仕事のあとを追うかたちになった珍しい例である。

いまテレビはあまりにも茶の間に浸透しすぎて、化物みたいな存在になっている。少なくともテレビの中にいる側の人間は、それが社会病理を助長していく危機感をもちながらテレビを作らなくてはいけない、堂本さんは自戒をこめて語っている。
・同対談・景山民夫、'87年9月11日号。

放送作家、直木賞候補作家、エッセイスト、タレントなど10種の肩書きをもつ景山さんは、いわばテレビの枠からとび出した作家といえる。

テレビの悪口を言いながら、テレビで仕事をしている珍しい人、として、「テレビに出てテレビの悪口を言うのは許されるのに、活字にすると許してもらえない、これ読んだ？というわけで悪口がぐるぐるまわってしまうんです」と映像と活字の違いを切りとって見せる。

テレビ界の流れは報道が中心になりつつあり、どんどん同時性と現実にテレビが揺り戻されている傾向にある、こうした状況の中でつくりものの部分はどうなっていくのか。例えばタモリ、たけしといったお笑いタレントのもっている笑いは、ある種の同時性、瞬発性をもっている、とするのが景山式視点。テレビ局の側にはクリエイティブな能力と意欲が乏しく、模放することしか考えない。それと制作プロが作ってきたものを試写室でチェックして文句をつけるだけが民放のプロデュサーの仕事になっている、とテレビの現状へ鋭い批判を加えている。（T）

●オルターナティブ・メディアの創造に向けて、鈴木みどり、「新日本文学」№472、1987年5／6月。

女性とメディアに関する一考察。環境化するテレビに対して女性が批判力を失い、依存度を強めている現状を述べ、それに続いてメディアに対する女性の自律性を養うための場としてメディア・ワークショップが果し得る可能性について考える。

紹介されているのはスイス・ジュネーブで活動する女性コレクティブisisWICCE（Women's International Cross-Cultural Exchage）による女性のためのメディア・ワークショップ。技術・経済的に発達した欧米諸国の女性と第三世界の女性が1カ月生活を共にし、スライド、グラフィック、出版、演劇、ビデオの各メディアについてフェミニストの視点で学び、制作し、批評し合っている。その後、このワークショップ参加者は草の根ネットワークを通して世界各国の女性グループへ派遣され、活動を共にする。

このような個々の女性の側で行い得るアプローチに加えて、筆者はテレビを例にとり、メディア内部でも女性たちによる変革への取り組みが始まっているとして、スウェーデンやアメリカ、カナダにおける「アファーマティブ・アクション」の現状も紹介している。（F）

●アメリカの放送界で働く女性たち① ポーラ・ライオンズの軌跡、早川与志子「放送レポート」№88、1987年9月。

ボストン市のローカル局WCVBTVの消費者問題専門のレポーターポーラ・ライオンズは、消費者を守る立場のレポートが評価され、この度3度目のエミー賞を受賞するなど話題になっている。ポーラは小学校教師、ソーシャルワーカー、市庁のプレス担当などの職業を経て、現在の仕事を射とめた。このテレビ局はプロデューサー、ディレクター、ライター、アンカー、レポーターの半分は女性。撮影、編集にも女性が多い。地域社会への貢献をモットーとするこの局は、かつて「ニューヨークタイムズ」に全米ナンバーワンと評価されたこともある。筆者は日本テレビ社員で現在、米国マサチュセッツ州在住。（J）

●レディスコミック・その全体像の研究 秋本雅代他、女性雑誌研究会コミック分析班、1987年9月。

レディスコミックは児童マンガ、青年マンガ、少女マンガと異なり主婦やOLの成人女性を対象とするマンガで、1980年代に入って続々と創刊され86年末現在で定期刊26誌、不定期刊6誌、月間約660万部が発行されているという。このような現状把握の下で行ったレディスコミックの内容分析報告。分析では85年夏発行の15誌から読み切り作品86話をサンプルとして取り出し、そこに登場する女男主人公計86組に関して属性（年令、職業、外見、容姿、婚姻形態、居住形態など）、性格について調べている。またストーリ構造の分析及び読者の意識に関する考察も行われており、女性とメディアの領域で軽視しがたいレディスコミックについて類似の研究が少ないだけに貴重。

分析によると、レディスコミックのキーコンセプトは"普通さ"にあり、女性主人公の多くは20代半ばの普通のOLや主婦でストーリーも意外性に乏しい。いってみれば読者の女性の日常生活に近似しており、男は頼りになる存在であり女は可愛いく男に依存するという今日の性の勢力関係を肯定している。問い合わせは女性雑誌研究会・諸橋泰樹（小金井市前原町3-40-1スカイコーポ206）まで。1部500円（送料共）。

子どものテレビの会（FCT）はテレビの送り手と受け手と研究者が立場を超えて集い、より良いテレビの実現をめざし実証的研究と実践活動を積み重ねていくためのひろば＝フォーラムとして、1977年10月に創設されました。その運営は、創設以来、事務局スタッフのボランティアと全国の会員からの会費と提出金、定例のFCTフォーラム（研究会）参加費、及び、調査研究報告等のFCTオリジナル出版物販布からの収入により行なわれています。
ガゼット（Gazette）の年間講読のお申し込み、バックナンバーのお問い合わせは事務局へハガキか電話（03・721・8694）でどうぞ。